第一セッションにかんする覚え書き

大中一彌

第一セッションでは，林淑美さん，平井玄さんの二人のスピーカーが冒頭に報告をおこない，これを受けて『再生産について』の訳者三名（伊吹浩一，山家歩，大中一彌）がコメントを述べた。司会は崎山政毅さん。

最初に報告をおこなった林淑美さんは『昭和イデオロギー　思想としての文学』（平凡社，二〇〇五年）の著者である。この本では，アルチュセールの「国家のイデオロギー諸装置」論をひとつの軸として，中野重治を中心とする戦前戦後の日本の文学や思想が分析されている。セッションにおいて林さんが取り上げたのは，戸坂潤の『思想と風俗』，そして中野重治「習俗の考え方」であった。

読みの枠組を簡単に示す主旨で，林さんは『再生産について』から三箇所を引用した。⑴まず最初に引用したのは，「法的－道徳的イデオロギーの持続的遍在的な介入」について述べた段落である（二三八頁）。⑵つづいて引用したのは，「一次イデオロギー（AIEにおける実践のなかで現実化される）」と「二次イデオロギー（一次イデオロギーを現実化するAIEの実践の副産物）」の区別を述べた箇所である（一三二頁）。林さんによれば，「一次イデオロギー」が支配的な政治（つまり国家）の言説であるのに対し，文学や日常的な言説は一次イデオロギーに従属する「二次イデオロギー」である。ここから，「二次イデオロギー」の実践（たとえば文学）の多様な具体相を，「一次イデオロギー」の持続的遍在的な介入との連関において理解するという視角が導かれる。⑶第三の引用箇所は，マクロな政治状況とミクロな日常生活の政治を貫くかたちで，国家諸装置間の「客観的な結託」が存在すると述べるくだりである（一三七頁）。この引用をつうじて指摘されたのは，「抑圧」（国家の物理的暴力）と「イデオロギー化」の関係である。一次イデオロギー（法的－道徳的イデオロギー）と二次イデオロギー（文学）の連関は，たんにAIEの異なる部門間に存在する共犯関係によってだけ産みだされるのではない。抑圧装置と諸AIEの体系全体の「客観的な結託」が，両者の連関を深く規定しているのである。

以上のような理解に立ったうえで，アルチュセールと共約性の認められる日本の思想家として，林さんは戸坂潤の名前を挙げた。とりわけイデオロギー（一次・二次），政治，経済の結節点としての習慣・習俗をめぐる，両者の見方の共約性が指摘された。その傍証として，戸坂『思想と風俗』の序「思想は風俗の形をとることで社会における肉体的リアリティをもつ」という箇所，ならびに同書の巻頭論文「風俗の考察」の「風俗習慣などと続くように，風俗は勿論社会的習慣と密接な関係を有っている。処で云うまでもないことだが，社会に於ける習慣，或いは又習俗は，社会の生産機構に基く処の人間の労働生活の様々な様式関係によって，終局的に決定されているが，二次的にはこの生産関係を云い表わす社会的秩序としての政治・法制が維持発展させる処のものであり，そして三次的には社会意識や道徳律が観念的に保証する処のものだ」という箇所が引用された。林さんは，このような戸坂＝アルチュセールの線に立って，

階級社会－習俗－イデオロギーの関係の素描にとりかかる（「文学研究の出番」である）。

このセッションにおける林さんの主題は，『中野重治評論集』（平凡社ライブラリー，林淑美編）に収められた「風習の考え方」というエッセイである。『評論集』では「初出未詳」としたが，他の研究者の協力によって，初出は昭和九年（一九三四）十二月一日，二日，四日の東京日日新聞であることが判明した。治安維持法違反容疑で検挙投獄されていた中野は，この年の五月に出獄したばかりである。「私はこの夏ひと月ほど田舎の村へ行っていたが，そのとき驚いたことの一つは子供の着物の変わりようだった」と始まるこの文章の舞台は，彼の転向小説『村の家』の農村である。当時の農村の習俗の変化をどう捉えるかという問いに取り組むなかで，東北地方を中心とした農村恐慌にたいする支配の言説の欺瞞性を中野は分析する。支配の言説は言う。「百姓たちは驚くほど贅沢になった。黍（きび）や稗（ひえ）をつくるものはほとんどない。むかしは跣（はだし）で歩いていたものが今は靴で歩く。若いものは髪の毛をのばしてチックをつけている。すべてこの西洋風の贅沢から今日の農村の疲弊が生まれている。いちばん悪いのが西洋の個人主義である。自分だけよければ他人はどうなってもいいというこの個人主義が，小作争議ともなり，共産党ともなり，日本古来の家族主義の破壊ともなっている」。これに中野は何と答えるか。「それは，槍や刀が飛行機，毒ガスになり，手織機場が紡績工場になり，米麦の年貢が村役場への税金となったのがけっして西洋化でないのと同様である。（それどころか日本の軍艦や紡績工場はその日本的特質を誇ってさえいる）。すべてそれらは西洋化でも西洋化の現象でもなく，生活の現実がさせた生産様式の変化，それの風俗習慣への反映である」。農村の風俗習慣の“西洋化”にたいする攻撃が，当時の新しい支配のイデオロギーによってなされており，「農山漁村経済更生運動」がその代表的装置である。内務省社会局長赤木某はいう。「次に身売り防止の問題だが，東北地方は永い間娘の売買が習慣になってゐる。親も娘を売ることについて道徳的責任などあまり考えてゐず，普通の如く思ってゐるし，一方娘も綺麗な着物や生活にあこがれて売られることを少しも苦痛としない習慣になってゐるとのことである。だから今度県や町村が防止運動に乗り出したところ非常な反感を買ひ，極力その警戒を避け，親と娘が協力して身を売るものさえあるとのことで，その行為があらゆる点から非人道的であるということを教へ，その習慣を打破するように教育することが最大の急務である」。昭和五年前後から始まる大恐慌，昭和六年の満州事変は，文字通り農村を窮乏化させた。そしてその窮乏による娘の身売りを貧農家庭の道徳の欠如の問題にすり替えようというのがこの発言である。しかも，この支配のイデオロギーは，最も遅れているがゆえに最も日本的とされる東北地方の道徳的“頽廃”という主題に，当時最重要の産業である繊維産業における「日本的」家族主義を対置する。梅津健吉「女工讃美」によれば，「『農家の生活様式にたいして，現在の女工賃金は決して跛行的低廉なものではない』。そのうえ工場では学校教育から生花教授までやって，婦人としての教養と嫁入資金とを作らしている，『かかる日本在来の風習に即した微妙な家庭と工場との連絡は到底他国で見ることの出来ぬことで，ここにわが国の淳美風俗が培われ，世界に冠絶せるわが女性の工業労働力が生れ出るのである』」。百姓がいかに飢えているか，女工がいかに搾られているか，そしてその事実にたいし道徳的イデオロギーがいかなる脚色を施しているか。この点について，戸坂の前掲論文では，このような道徳的イデオロギーは「マルクス主義社会科学乃至文化理論」にとって打倒すべき対象以外のなにものでもないとされている。中野の言う「ぽんびきの理

論」＝日本資本主義の道徳的イデオロギーは，かれじしんの言うように「大きく見れば破れかけている」。しかしそれがどこで私たちを縛り，どこで破れかけているのかを研究することは，「客観的に切れかけているものを自分から切断する力をもつようになるための自己鍛錬」にほかならない。

平井玄さんは「アルチュセール素人の読み方」と題して報告をおこなった。これは中野重治「レーニン素人の読み方」の引用であって，林さんへのオマージュでもある。平井さんは68年の体験から話を始めた。高校生として，また新宿でこれを経験した観点からすると，『再生産について』は非常に既視感にあふれた本である。AIEの主調音とのあいだで軋み＝ノイズを立て反抗する青年たちの声と行動，これにたいするアルチュセールや周囲のひとたちの考えがこの本として結実したのであろう。68年以降の運動においては，投石という行為が広く行われていた。棍棒と投石によって近代国家の組織した警察力に対抗するというのは当時にあってもアナクロニズムと認識されていた。しかし目抜き通りのデパートのショーウィンドーの破壊行為などがしばしばみられたように，いわば鏡が送りかえしてくるみずからの姿，主調音の呼びかけにこたえようとするみずからへの拒否が，この鏡を叩き割る投石という行動には現れていたのかもしれない。またこうした行動は，おそらく上部構造への侵入という動きでもあった。68年以前の運動においては生産点など下部構造が基盤であった。これにたいし平井さんたちは消費点からの批判を唱えた。つづく70年代は，こうした68年的なものの無化，吸収がさまざまなやり方で目指された時代であった。ところが89年以降，68年世代に特有の消費と結びついたプロト・アナーキズムは，AIEの市場化・産業化，欲望の創出による市場形成というかたちで取り込まれることになった。例えば広告マーケティング産業の隆盛をみればそれは明らかである。宗教なら，アメリカのメガチャーチ。大学なら，立命館大学がある。こうして考えるとアルチュセールがAIEを列挙したリストのなかの最後にあった情報文化装置の比率がたいへん大きくなっていることが分かる。さてこうした歴史的文脈における抵抗のかたちであるが，例えば「武装闘争はプロパガンダの最高の形態である」（映画『赤軍-PFLP　世界戦争宣言』）という直接的鋭角的な言い方があった。当時から疑念を抱かせる点がなくはない言い方であったが，しかしそれはひとつの実践を伴っていた。ひるがえって90年代以降の資本主義は，より剥き出しのかたちで，「金儲けこそプロパガンダの最高の形態である」と宣言するにいたった。ホリエモンにたいする共感の有無で平井さんは受験勉強中の娘さんと論争になったという。

コメンテーターの3名のなかでもっともよく準備された発言をしたのは山家さんである。山家さんは心の病をめぐる言説の消費の問題を，クリントン元大統領のモニカ・レビンスキー事件後のコメント，「消費セラピー」，精神障害者への生活補助の削減，近隣社会の監視等々，豊富な例を引いて指摘した。伊吹さんはみずからの活動家としての貢献やアルチュセールにかんする見識を披瀝しつつ，靖国神社のAIEとしての性格をめぐって考察を展開した。大中はロベール・リナルトの小説『レタブリ*L'établi*』を引用しつつ，生産点への定着といった当時の学生運動のあり方について述べた。

以上の文章は，録音に基づく筆者の観点からするセッションの要約であり，必ずしも正確ではない部分がある。とくに，引用文の挿入箇所の選択についてはセッションで参照されていた文献に基づき自由におこなった。ご寛恕されたい。またマラソンセッションを組織した皆さん

にこの場をお借りして感謝したい。バリバールさんにもこのような楽しい企画があったこと通報しておきました。